

« Balzac *et alii*, génétiques croisées. Histoires d'éditions » (Colloque international organisé par le Groupe International de Recherches Balzaciennes, sous la direction de Takayuki Kamada et Jacques Neefs, 3-5 juin 2010, à l'Université Paris Diderot et à la Maison de Balzac)
http://balzac.cerilac.univ-paris-diderot.fr/cariboost_files/Programme.pdf

本シンポジウムは国際バルザック研究会(GIRB)の主催による、生成論研究を目的とする国際研究集会である。題名が示すように主軸は二つある。一つはバルザックを中心に据えた上で複数の作家の作品制作のあり方を比較する比較生成論。もう一つは自筆草稿等の狭義の生成資料を中心とした従来型の生成論の枠組に囚われることなく、校正刷り、新聞・雑誌掲載版や様々な版本に見られるエクリチュールの転位や変容の運動のダイナミズムを明らかにしていく「印刷物の生成論」である。後者はバルザックの生成論研究において特に有効であるが、さらに今後、他の作家への適用が大いに試されるべきアプローチである。

さて GIRB が生成論を本格的に扱うシンポジウムを開催するのは 1999 年の« Balzac, l'éternelle genèse »以来のことであり、今回は日仏共同参加としてジャック・ネーフと鎌田隆行がそれぞれフランス側と日本側のコーディネートを担当した。かくして、好天に恵まれたパリの空の下、二会場を舞台に二日半にわたって討議が行なわれ、バルザックの作品生成と、バルザックを多かれ少なかれ意識しながら創作活動を行なったスタンダール、フローベール、ゾラ、プルーストらの制作のあり方が比較されるとともに、個々の作家のケースについても複雑な再版の経緯等の印刷物の問題を含む広い視野での検討が行なわれた。

バルザックを中心に論じた報告では、これまで生成論の観点から扱われることが比較的少なかった新聞連載小説(テランティ、村田)や戯曲作品(ボルダス、大下)が仔細に分析され、さらに没後刊行の版本に見られる異文の問題(デリュエル)が考察されたことで、コーパスの大幅な拡大が実現した。また、バルザックの創作様態や小説のエステティック、作品計画の方向性の変化をめぐって、包括的な視野からの論点整理(ヴァッション)に加え、年代や作品を絞りこんだよりミクロな分析(鎌田、中山、松村)が提示された。かつて« Balzac, l'éternelle genèse »においてマクロジェネティックの方法論が中心だったのに対し、今回のシンポジウムではマクロとミクロの双方を視野に収めつつ、全方位的な角度からバルザックの複雑なエクリチュールの運動の解明が試みられたのが特徴である。

他方、シンポジウムの公式行事の一環として、バルザックの作品と書簡のコンコルダンスの公開によって多くの研究者に恩恵を与えた霧生和夫氏の偉業を記念するため、初日の夕方にカクテルパーティーが開催された。GIRB 会長ニコル・モゼ氏が霧生氏の業績を讃えるスピーチを行い、参加者一同によって祝杯が挙げられた。

ことほどさように、十九世紀研究、生成論研究、バルザック研究の領域における日本人研究者のプレゼンスを大いに示す好機となり、刺激的な学術交流が実現した。不慣れた運営担当者である私を励ましながらかサポートしてくれた日仏の関係者たちに改めて感謝の意を表したい。

(文責・鎌田隆行)